

## 鈴木登教授退任記念論文集の刊行にさいして

経済学部長 山 田 彌

鈴木登先生の定年によるご退職に際して、『立命館経済学』において退任記念論文集を特集し、ここに刊行することになりました。

鈴木先生は、2001年3月31日をもって、定年により立命館大学教授の職を退かれます。先生は、1980年4月に立命館大学経済学部教授として就任されました。それ以来今日まで20年の期間、立命館大学および経済学部の発展のために尽力してこられました。この間の先生のご功績をたたえ、そのお人柄を敬愛し、ここにささやかながら記念論文集を編集・刊行し、先生に贈呈することになりました。

鈴木先生は、1935年に東京都にお生まれになり、1956年に慶應義塾大学経済学部に入学されました。1960年3月に同学部を卒業され、一時期民間企業に在籍されたのち財団法人三菱経済研究所に入所され研究者としてのスタートを切られました。同研究所には10年間在職され、1970年株式会社三菱総合研究所の設立とともに同社に移籍されました。そしてその10年後に当たる1980年4月に本学経済学部教授に就任されたわけです。先生は本学就任以来、国民所得論、経済統計、産業構造論および経済変動論などの科目担当者として学部および大学院の教育に当たられる一方、研究面ではそれらを枠組みとする実証分析および科学的認識論としての近代経済学の性格と特徴にかんする理論的研究などの課題に、終始変わらぬ真摯な姿勢で取り組まれてこられました。

実証的な分野では1988～9年に本学人文科学研究所の総合研究（国際摩擦と国際理解）に共同研究者として参加され、日米欧における産業構造の変化、とくにこれら先進諸国におけるサービス経済化の動向を数量的に把握する課題に取り組まれました。その成果は共著『経済摩擦と調整』に纏められています。また先生は、地域産業構造の諸分析にも積極的に取り組まれ、本学人文研の個別研究および文部省科研費で他大学教員との共同研究を含む多くの諸成果を公表されています。

理論的な分野では1988年に『近代経済学の考え方』を出版され、近代経済学の方法論における哲学的基礎を明らかにすべく努められました。また、人文研総合研究としての成果『21世紀経済学のパラダイム（世紀転換期の日本と世界）』においては、近代経済学の認識論的基礎と実践的応用における問題点を、さらに経済学部創立50周年記念出版『進化・複雑・制度の経済学』では経済理論の有効性について検討され、これらのなかで、近代経済学の諸成果が現実についての実証分析における諸方法としての単なる工具箱に留まらず科学としての認識論のレベルに到達していること、そのことがまた多くの新たな諸課題を抱えるに至っていることを指摘されています。

先生はまた、確率論や不確実性についての哲学的基礎、平成不況の経済変動としての性格、ロシア・中国の体制移行にともなうインフレ問題、市場組織の制度的慣行における歴史的諸性格な

ど、さまざまな課題に対して興味関心を持たれ旺盛に研究してこられました。これらの研究面における幅広い課題意識は、三菱総合研究所以来の長い研究生活の中で、国際学会や諸シンポジウムへの積極的参加を通じて築かれた多くの内外研究者達との幅広い研究交流を通じていっそう触発され形成されてこられたものとお聞きしており、この点はわれわれ後進としても学ぶべきところだと思われまます。

教育の面において先生は、とりわけご担当科目の講義では理論的内容とあわせて現実経済との関係をとくに重視することに留意され、関連経済諸統計についての豊富な知識を生かして学生の興味関心・問題意識の喚起に常に努力されてきました。幅広い研究を基礎にした学部教育のあり方の一例として、われわれも大いに学ばせていただいたところです。

学部教育のあり方については、先生は本学就任以降一貫してカリキュラム改革など学部教学改革の議論に学部教授会の一員として積極的に参加され、少なからぬ貢献をされてこられました。とくにご赴任直後の二部改革および87年教学改革の時期においては学部主事・調査委員長を3年間継続して勤められ、教授会の議論をリードし取り纏めるべく努力されました。

学生諸君に対しての先生のご指導方針は、その自主的創意を可能な限り尊重するそれであると伺っております。留学生や社会人学生諸君の信望も厚く、また、ご担当ゼミからは金融諸機関や製造業などの優良企業、地方自治体・公益法人など幅広い分野に多数の卒業生が輩出し活躍されています。

21世紀に第一歩を踏み出す今日、大学における研究と教育、そして経済学と経済学部のあり方についてわれわれは今後も広く深く問い直しを続けることを必要としています。そのような時に先生とお別れしなければならないのは誠に残念なことでありますが、これも時の定めとあればやむを得ません。本学における先生の長年にわたるご努力・ご貢献に対して立命館大学は名誉教授の称号をお贈りすることになっております。本学を退任後先生は他県の公立大学にご赴任とのことですが、随時機会を得て今後とも一層のご指導とご鞭撻をお願い申し上げるとともに、先生のますますのご健勝とご活躍を心から祈念して、送別の言葉とさせていただきます。



鈴木 登教授 近影